

田原市図書館ふしぎ文学半島プロジェクト2015
“ふしぎ文学の達人”が選んだ 「はじめてのふしぎ」オススメ本

選者：金原瑞人氏（翻訳家・大学教授）

1. 《トム・マーロウの奇妙な事件簿》シリーズ

- 『死神の追跡者』クリス・プリーストリー 堀川志野舞訳 ポプラ社 2011
『悪夢の目撃者』クリス・プリーストリー 堀川志野舞訳 ポプラ社 2012
『呪いの訪問者』クリス・プリーストリー 堀川志野舞訳 ポプラ社 2012

選者コメント

◆ヤングアダルトむけの傑作「ホラー＋ミステリ」三部作。不気味な殺人事件、呪い、騎士、古の王…
…ありがちな題材を驚くほどうまく使っていて、とにかく読み終わらないと寝られない。怖いし、謎が
気になるし、それに……主人公のトム少年がすごく魅力的なのだ！

2. 『まだなにかある 上下』パトリック・ネス 三辺律子訳 辰巳出版 2015

◆16歳の少年セスは寒い冬の日、荒れくるう海に飛びこんで死んだ。ところが気がつくと、坊主頭
で、傷だらけで倒れていた。無人の町にひとり。セスは水と古くなった缶詰で命をつなぎながら自
問する。ここは地獄なのか……やがて突きつけられる恐ろしい可能性。自分は自分ではないのもし
れない！

3. 『ハリス・バーディック年代記』クリス・ヴァン・オールズバーグほか 村上春樹ほか訳
河出書房新社 2015

◆クリス・ヴァン・オールズバーグの描いた不思議でちょっと怖い絵、14枚に、14人の作家が短い、
不思議でちょっと怖い物語をつけた。物語を書いたのは、スティーヴン・キング、タビサ・キング、
ウォルター・ティーン・マイヤーズ、ケイト・ディカミロ、などなど……それからオールズバーグ自
身も。

4. 《ウェストール短編集》シリーズ

- 『真夜中の電話』ロバート・ウェストール 原田勝訳 徳間書店 2014
『遠い日の呼び声』ロバート・ウェストール 野沢佳織訳 徳間書店 2014

◆ウェストールといえば、恐怖小説、戦争小説、幽霊小説などで有名。そのウェストールの短編集2冊
には、戦争物のホラーあり、戦争がらみでリアルだけど怖い物あり、戦争物だけど感動的な話あり、幽
霊物のホラーあり、幽霊物だけどしんみりした話あり……とにかく、いろんな話がここには集められて
いる。ただ、すべてに共通しているのは、とてもおもしろい、ということ。

選者：島田尚幸氏（あいち妖怪保存会代表）

5. 『妖怪ひみつ大百科』 村上健司 永岡書店 2015

◆「日本妖怪大事典」（角川書店）を記した筆者が、現在多くの人が想定する「妖怪」を網羅的に収集した一冊。章末には「妖怪学校」として、国語・算数・理科・社会の内容（？）を絡めたクイズも掲載し、子供から大人まで楽しめる。全国各地の伝承に多く材を取っているのも特徴で、「愛知の妖怪」も、もちろん紹介されている。

6. 『異界百夜語り』 堤邦彦・橋本章彦編 三弥井書店 2014

◆古今東西様々な怪異怪談とその周辺を扱っているが、決して難しくも長くも書かれておらず、むしろ次々に紹介される項目に「こんなにもおもしろい話か？」と驚くこと請け合いである。（章立ても「となりの異界」から「都市伝説を読み解く」「まじめなポルノ」に「土俗の記憶」と興味を引くカテゴリ分けがされていて、どこからでも楽しめる。）

怪異資料を紹介する一流のブックガイドとも言え、この本を片手にふしぎ図書館を巡るのも楽しい。

7. 『怪異を媒介するもの』 東アジア怪異学会編 勉誠出版 2015

◆「怪異」として扱われる対象は、時代によって異なる。

本書では「（怪異を）媒介するもの」に着目することで、怪異とその背景に横たわる様々な事象を浮かび上せる方法を模索し続けてきた怪異学会の取り組みが収録されている。妖怪、陰陽師、夢解き、占術、葬送儀礼…様々な「媒介」における手段やプロセス、関係する人物や職能、記録のされ方を非常に丁寧に分析している。

8. 『山怪 山人が語る不思議な話』 田中康弘 山と溪谷社 2015

◆「海」と並び異界とされてきた「山」。そこでは、狐狸妖怪に惑わされるのも決して過去のことでなく、今も現実に語られている。昨今多く見られる怪談本のような「怖さ」を中心に置いたものではなく、「得体の知れない・不可解な」出来事が淡々と綴られている。語られる伝承は単なる「情報」ではなく、息遣いが聞こえ、体温を感じられる、まさに「人伝（ひとづて）の話」であると再認識させられる。



リストの8冊（シリーズ含む）は、田原市図書館で貸出・予約可能な資料です。 2015.10 作成